

【全訳】

ミホ：アキラ、レイナはアオバ中学校の生徒です。彼女たちは放課後に教室で話をしています。そのとき、彼女たちの英語の先生のスミス先生が彼女たちに話しかけます。

スミス先生：やあ、みんな。何をしているんだい？

ミホ：こんにちは、スミス先生。私たちは学校新聞を作っているところです。来週、それを発行するつもりです。

スミス先生：ああ、新聞だね。それには何について書くつもり？

アキラ：主な記事は、ほくたちの給食についてです。ほくたちは先週、この市の給食センターを訪れて、そこで職員の1人の高木さんに取材をしました。

スミス先生：それはおもしろそうだね。

アキラ：はい、本当におもしろかったです。センターにはいくつかの部屋があり、それぞれの部屋で職員が異なった種類の作業をしていました。ほくは、そこでとても大きな鍋も見ました。

レイナ：高木さんはとても親切な方で、職員の方々が生徒たちの健康を本当に気にかけているということを感じました。職員の方々はどの生徒も給食を好きになって、全部食べることを望んでいます。

ミホ：センターはこの市の6つの学校に給食を提供しています。職員は、それぞれの学校で生徒が食べ残した食べ物の割合のチェックもしています。グラフ1を見てください。それは私たちの学校での割合を示しています。

スミス先生：割合が小さくなっているのがわかるね。よいことだね。でも、2022年の6月は、その年の2月より割合が少し高かったんだね。なぜかな？

レイナ：そのとき、暑い日がたくさんあったので、多くの生徒があまり食欲がなかったんです。それが理由だと私は思います。

スミス先生：なるほど。それで、きみたちはその割合についてどう思う？

ミホ：ええと、たくさんの食べ物を残すのは環境によくないので、より小さい割合がよりよいです。

アキラ：日本での平均の割合は約7%らしいので、ほくたちの学校での割合はかなりよいです。でも、ほくたちはそれに満足していません。グラフ2を見てください。それは、2022年10月の6校すべての割合を示しています。D校がほくたちの学校です。

スミス先生：ええと、ほかの2校での割合が私たちの学校での割合より小さくて、C校での割合が一番小さいね。

アキラ：そのとおりです。ほくたちはそれがうれしくありません。ほくたちは、次回はほくたちの学校での割合が一番小さくなるとよいなと思っています。

スミス先生：私もそう思うよ。何かそのためのアイデアはあるのかな？

ミホ：私たちはそれについて話しているところです。私たちは、この新聞でこれらのグラフといっしょに生徒たちにいくつかのアイデアを見せるつもりなんです。

アキラ：ほくたちの1人1人が食べ物を全部食べようと努めるべきだと、ほくは思います。「給食に好きではない食べ物があると、それを残す」と言う生徒もいます。それは、よくないです。給食は栄養のバランスがよいから、給食の食べ物をいくらか残すのはほくたちの健康によくありません。ほくはそのことについて新聞で生徒たちに伝えたいんです。

ミホ：アキラの言うとおりです。高木さんは、いくつかの野菜がよく残されると私たちに教えてくれました。好きな食べ物だけではなく、野菜のような好きではない食べ物も食べるべきだと生徒たちに伝えましょう。

レイナ：その一方で、給食は一部の生徒には多すぎます。私たちの給食の量は各生徒にちょうどよくなっていて、それをすべて食べるようにするべきだとはわかっています。でも、具合が悪かったり食欲がなかったりするときには、すべては食べられない生徒もいます。

スミス先生：なるほど。ええと、もし食欲がなかったら、「私は今日、食事はたくさんはいらない」と言って、食べ物の量を少なく受け取ることができるよ。もし、鍋の中に食べ物がいくらか残っていたら、何人かのおなかをすかせた生徒たちがそれを食べることができる。手をつける前なら食べ物を分け合うことができるよ。

レイナ：それはよいですが、一部の生徒にとっては、自分の気持ちを表して、「私は、食事はたくさんはいらない」と言うのが難しいかもしれません。それを表すカードを作るのはどうでしょう？ 食欲がないときには、教室で給食を盛りつける生徒たちにそのカードを見せることができます。

ミホ：私は別の意見があります。給食の時間がもっと長いとよいと思います。ときどき、すべての食事を間に合うように食べるのが私には難しいです。

スミス先生：でも、学校の時間割をすぐに変えることはできないよ。

ミホ：わかります。でも、もっと効率よく時間を使うことができると思います。例えば、すべての生徒がお互いに助け合えば、もっと素早く給食の用意をすることができます。そうすれば、給食を食べるための十分な時間を作ることができます。

アキラ：わかった。それらのアイデアすべてについて新聞に書こうよ。ほくは、生徒みんながやる気になって、お互いに助け合うとよいと思う。各クラスで生徒が残した食べ物の量をチェックして、それを新聞で見せるのはどうだろう？ きつとそれは生徒たちをやる気にさせると思うんだ。

レイナ：私もそう思う。それをしましょう。

スミス先生：きみたちはよい仕事をしているね。きみたちの新聞を読むのが楽しみだよ。